

## アジアのデザイン文化の比較研究

山車の造形と祭礼文化を中心にして(4)

### COMPARATIVE STUDY OF DESIGN CULTURE IN ASIA

Focusing On The Forms Of Mountain Floats And Festival Cultures (4)

今村 文彦	基礎教育センター 教授
杉浦 康平	アジアデザイン研究所 所長
齊木 崇人	芸術工学部環境デザイン学科 教授
松本 美保子	名誉教授
山之内 誠	芸術工学部環境デザイン学科 准教授
黄 國賓	芸術工学部ビジュアルデザイン学科 准教授
さくま はな	芸術工学部アート・クラフト学科 助教
尹 聖喆	芸術工学部まんが表現学科 助教
長野 真紀	大学院芸術工学研究科 助教
曾和 英子	芸術工学部プロダクト・インテリアデザイン学科 非常勤講師

Fumihiko IMAMURA	Center for Liberal Arts, Professor
Kohei SUGIURA	Director of Asian Design Research Institute
Takahito SAIKI	Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor
Mihoko MATSUMOTO	Professor Emeritus
Makoto YAMANOUCI	Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Associate Professor
Kuo-pin HUANG	Department of Visual Design, School of Arts and Design, Associate Professor
Hana SAKUMA	Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Assistant Professor
Seongcheol YUN	Department of Arts and Design, School of Arts and Design, Assistant Professor
Maki NAGANO	Graduate School of Arts and Design, Assistant Professor
Eiko SOWA	Department of Product and Interior Design, School of Arts and Design, Adjunct Lecturer

#### 要旨

本報告は、アジアデザイン研究所の2014年度の活動について概述するものである。研究所では開設以来、アジア各地域にみられる祭礼の多様な山車の造形的特徴、象徴性、世界観、その仕組みと社会や環境との関係性などについて、デザインの視点から総合的に把握する調査、研究を継続的に取り組んできている。

2014年度は、タイ北部で高僧の葬儀の際につくられる象の頭をもつ鳥型の火葬山車の象徴的意味、制作方法およびタイ仏教の世界観、死生観を探るため、バンコクおよびチェンマイで調査を実施した。この火葬山車の幻獣はハサディリンと呼ばれ、ヒマパンという伝説上の森に棲む多くの不思議な動物たちのひとつとされる。死体をくちばしか爪でつかみ、天界に連れさるといわれ、徳の高い僧侶が展開に戻るのにふさわしい乗り物として選ばれたと考えられる。在家信徒からの寄付の多寡により、多様な造形で山車が制作される。

さらに、ジャワ舞踊とバリ島の影絵芝居(ワヤン・クリ)についての公開の研究会と公演会を開催し、アジアのデザインの奥深さと魅力を啓蒙する活動も展開した。

これらの一連の活動により、アジアの山車を構成するデザイン語法、象徴性、神話性の広がりやを解明する手がかりを得ることができた。

#### Summary

This report deals with the main research theme of Research Institute of Asian Design (RIAD), which makes clear design language of mountain floats from their wide variety of forms, symbolic meanings, cosmology and their relationships of society and natural environments.

In this year, we carried out an overseas investigation on the symbolic meanings of mythical creature, used at the funeral of a monk of higher rank, which has the head and trunk of an elephant and the body of a bird in northern Thailand. This creature called *Hasadilung* inhabited the legendary forest of *Himapan* in cosmology of Thai Buddhism and took away the deceased to Heaven with a sharp beak. A monk of higher rank is believed to possess great merits, so this bird-shaped crematory tower is used for his funeral.

In addition, we promoted public awareness of the deepness and attractiveness of Asian Design, by holding public performance on the Javanese dance and the Balinese Wayang Kulit (shadow puppet).

RIAD got very useful insights from these activities and research for deep understanding about design cultures of Asia.

○研究目的

本研究は、アジアデザイン研究所の開設以来の研究活動として設定している「アジアの山車文化」についてデザインの視点から調査、研究を進めるものである。アジア各地域の祭りでみられる多種多様な山車の造形的特徴、象徴性、それらの背景となる世界観や祭礼の仕組み、社会や空間環境との関係などについて、現地調査、比較研究を通じて総合的に検討し、その全体像、デザイン手法（語法）を明らかにすることを目的としている。これらの一連の調査研究を通して、さまざまな山車の形態、造形、地域的固有性の背後にある基底的な共通性に着目し、アジアのデザインにおける文化的特徴、独自性を追求し、把握することを目指している。

○ 2014 年度研究活動

本研究は 2011 年度からアジアの山車文化に焦点をあてて継続的かつ集中的に実施してきたが、2014 年度の主な活動は以下のようにまとめられる。

- (1) タイの高僧の葬儀に用いられる鳥型火葬山車およびタイ仏教の死生観に関する現地調査
- (2) 祭りに曳きだされる山車の造形と深い象徴的関係をもつ宇宙軸、「柱」についての研究会の開催
- (3) アジアの多様なデザインや表現を広く理解してもらうため、インドネシアのジャワ舞踊とバリのワヤン・クリ（影絵芝居）の公演

以下にそれぞれの活動について報告する。

- (1) タイ仏教の死生観および高僧の葬儀に用いられる鳥型葬儀山車の調査

2013 年度開催の国際シンポジウム「送る船・飾る船—鳥と龍が支えるアジアの舟山車」において、ミャンマーのインレー湖でおこなわれるパウンドーウー祭に運航される、伝説の鳥「カラウェイ」を模した鳥形の黄金船が報告された（写真 1）。その後、ミャンマーやタイ北部において、高僧の葬儀の際に鳥と象を組み合わせた幻獣を作り、この中に遺体を安置して火葬する習慣があることが判明した（写真 2）。



写真 1 カラウェイ船（ミャンマー）



写真 2 タイ高僧の葬儀に用いられる葬儀山車（チェンマイ）



写真 3 タイの寺院内（四面には釈迦の生涯が描かれる）

この不思議な造形の意味、その背景となるタイ仏教の世界観、死生観などについて理解するため、2014 年 8 月にタイのバンコクおよびチェンマイで現地調査を実施した。この調査は、ソーン・シマトラン氏（シラパコーン大学）の全面的な協力を得ることができ、実り多いものとなった。

タイ仏教は、日本や中国の大乗仏教と異なり、釈迦によって定められた戒律と教えの遵守を基本とする上座仏教である。釈迦個人への信仰が篤く、釈迦像を中心に据えた寺院は釈迦に帰依する場として、全壁面には釈迦の生涯譚を中心とするタイの仏教世界が華麗な色彩で精緻に描かれる（写真 3）。

タイ仏教では出家した僧が戒律を守り、在家信徒は

彼を保護するとともに、タンブン（積徳）と称して寺院や僧への寄付をおこない、今生で徳を多く積むことがよりよい輪廻転生につながるとされる。そのため高德の高僧に対して篤い信仰が寄せられ、その葬儀はタンブンの絶好の機会となる。

タイ北部のチェンマイを中心とした地域はかつてのランナ・タイ王国であり、ミャンマーに支配された歴史をもち、独自の文化を色濃く保持している。前述した鳥型の火葬山車を制作している僧侶をチェンマイ郊外の寺院に訪ね、その象徴的意味や制作方法について聞き取り調査を実施した（写真 4）。

この僧侶やその他の資料によれば、この象の頭をもつ鳥は、「ハサディリン (Hasadilung)」または「ハサディ (Hussadee)」と呼ばれる神話上の動物である。この動物を含め、タイの寺院などで2種類の動物を組みあわせた不思議な動物の造形が至るところで見られる。これらの動物は、ヒンドゥー教および仏教の宗教的世界観と密接に結びついていて、タイ仏教の世界観を説いた「三界経」では、世界の中心にある須弥山のまわりの海に浮かぶ4つの大陸のうちの1つ「瞻部州（閻浮提）」に人間が住んでいるという。この瞻部州の中心にヒマラヤに比定される山がそびえ、麓にある伝説上の森、ヒマパン (Himapan) にナーガ、ガルータ、キンナラ（緊那羅）、キンナリ、シン（獅子）などの神話上の不思議な動物が棲んでいるとされる。ほとんどの寺院の壁画には必ず描かれるテーマで（写真 5）、王族の葬儀でもこれらの人形が先頭を巡幸する。ハサディリンは、これらの動物のひとつで、多くの物語では巨大で、強い力を持つとされ、「三界経」には、死体をくちばしか爪でつかみ、天界に連れさると記述される（写真 6）。こうした神話上の位置づけから、高德の僧侶の靈魂を天界に運ぶためにこの霊鳥が選ばれていると考えられる。在家信徒からの寄付の多寡により、多様な造形で山車が制作される（写真 7）。この葬儀山車については未解明の部分も多くあり、さらに調査研究を継続して進めていくことにしている。

(2) 祭りに曳きだされる山車の造形と深い象徴的関係



写真 4 僧侶への聞き取り調査（チェンマイ郊外）



写真 5 寺院の壁画に描かれたヒマパンの聖獣（右は拡大図）



写真 6 ハサディリン（葬儀山車のモチーフ）



写真 7 ハサディリンの多様な形態

をもつ宇宙軸、「柱」についての研究会の開催

山車の造形言語に必須の「柱」が日本の伝統文化でどのように扱われてきたのかを探るため、民具研究の第一人者である神野善治氏を講師として研究会を開催した（図1、写真8）。大黒柱、棟上げなどの身近な柱をはじめ、諏訪の御柱祭、伊勢神宮の「心の御柱」、出雲大社のウズ柱などで、柱を立てることの意味づけ、茨城県の利根川流域でみられる、柱上で曲芸をする「ツク舞」、船の帆柱、祇園祭の山鉾の柱と天王信仰や帆柱を立てる技術とのつながりなどの豊富で興味深い民俗事例をもとに解説された。さらに「柱」を中心にして、一見して関連性のない多くの事象でも、なんらかの形で文脈を見だし、相互関係、関連性を発見でき、新たな想像力を生み出すことも強調された。

(3) アジアの多様なデザインや表現を広く理解してもらうため、インドネシアのジャワ舞踊とバリのワヤン・クリ（影絵芝居）の公演

昨年度に引き続き、アジアのデザインの多様性を学部学生や一般にも広く啓蒙する社会活動として、2014年度はジャワの宮廷舞踊とバリのワヤン・クリの公演を企画し、2015年1月に実施した（図2）。

ジョグジャカルタの国立芸術大学に留学し、宮廷でも踊った経験のある舞踊家の佐久間新氏が、ジャワの舞踊における身体表現の方法とジャワとバリの舞踊の違いなどについて解説した。とくに動と静、カサル（粗野）とハルス（精緻）が外面的な動きのみならず内的な感情も含めたあらゆる側面で重要視されることを強調された。その後、踊りを披露していただいたが、感銘深いものであった（写真9）。

引き続き、昨年度も公演していただいたバリ島のワヤン・クリの唯一の日本人ダランで、国内外で活発に活動を続けている梅田英春氏にワヤン・クリの解説と「スタソーマ物語」を演じていただいた（写真10）。ジャワの舞踊とバリのワヤン・クリという静と動の対比が興味深く、一般参加も含めた多くの観客にとって有意義な公演となった。



図1 研究会の案内ポスター 写真8 研究会の様子



図2 ジャワ舞踊とバリ影絵芝居の案内ポスター



写真9 ジャワ舞踊を踊る佐久間氏



写真10 影絵の説明をする梅田氏

○まとめ

2014年度は、タイでの海外調査において、アジアの山車のデザイン語法、宇宙論的な広がりをもつ重要な資料と情報を得ることができた。また、これまでの研究成果を社会的に公開する試みも継続的に実施している。次年度以降も国内外の調査を始め、研究成果を整理、体系化し、本研究の全体的なまとめを検討していくことにしたい。